

## 我が青春の苦闘記

北海道 宮西喜市

### 一 私の少年期

私は香川県高松市において、父春次、母ナカの次男として大正九（一九二〇）年に生まれたが、父は四男だったので、分家して県内の木田郡古高松村で生活していた。私も満蒙開拓青少年義勇軍に志願するまでは、少年期を古高松で過ごした。

現代社会の少年たちの生活と比較検討の意味もあつて、私の少年期はどのようなふうだったかを少し書くことにする。人間と生まれた一生において、少年期は昔も今も変わりなく、その人の人格形成に

一番大事な時期である。

さきの大戦終結の前後における、あの苛酷な諸情勢のもとで、これに耐え忍び廃墟の中から立ち上がり、必死の努力によって世界中が驚嘆するような経済大国に成長したその力は、すべて戦前の学校教育を受けた私たちのごとき、現在七十歳以上の人々の結集された力である。そしてその力は、強靱な心身から生じたものである。それは少年期において知らず知らずのうちに身についたもので、当時のしからしめたところである。

思い起こせば、私たちの少年期は現在では考えられないくらいに貧困の時代で、農村においても三度の食事も満足にとれなかった。父は仏壇屋で、子供は男四人に女二人の八人家族だった。定収入

がなく、日々の生計は大変に苦しいものだった。朝は麦三割の御飯、昼は大抵ふかし芋、そして夜は雑炊かうどんだけだった。学校に持っていく弁当も、地主や官吏など少し裕福な家の子供は白い御飯だったが、それ以外の子供は麦飯か芋だけの弁当で、子供心にも悲しい思いをしたものだった。私は、三年生のころから昼食時間には駆け足で家に戻り食べるようにしていた。それによって体力も増強したようだった。

また、年齢相応に家の手伝いもしていた。農繁期になると学校も休校となり、みんなはそれぞれ農作業の手伝いをした。もちろんお菓子などは口に入れることがほとんどないので、木の実・草の実など食べられる物を山に入って獲り、何でも食べたものだった。

現代の子供のように好き嫌いなど言っていたら、こつびどく叱られたものだった。現代の少年期の者について、寒心に耐えないことは余りにも雑音の多いことで、TV、TVゲーム、パソコン、携

帯電話等々室内に閉じこもって体を動かすことなく、ただ指先だけで過ごしていることだ。これでは、悪知恵だけが先に身についてしまうことだろう。少年としての心身育成の大切な時期に、どちらの時代がよいのかは別にして、こんなことで果して私たちが過ごしてきたごとくに、どんなに苦しいことがあつても、それを乗り越えて生き抜くことができる強靱な心身が養えるのだろうか、この引揚労苦記録を書くに際して一番先に感じたことである。これは老人の一人合点の取り越し苦労であろうか？

### 二 満蒙開拓義勇軍に志願

昭和十三（一九三八）年一月、私が青年学校三年生のとき、満蒙開拓青少年義勇軍の募集があった。生来自然相手の農業が好きだった私だが、この狭い香川県で農地を求めて新規就農することなどは思いもよらぬことだった。一級上の友人がブラジルに移住したことから、海外雄飛も考えていたところなので、早速志願しようと決心した。

志願するからにはまず父の許しが必要だったが、そのことをなかなか言い出せずに毎日悩んでいた。いよいよ締切日がせまってきたので、意を決して父に話したところ、思いがけず「どうしても行きなければ行け。だが途中でやめたら家には入れないから、その覚悟で行け！」と言われた。早速願書を提出した。村からは二人だった。

無事合格。一月二十六日に香川県第一回送出義勇軍の一員となり、香川県職員に引率されて約二百人の同僚と共に茨城県の内原訓練所に入り、第一次一中隊で二カ月の訓練を受けることになった。

四月十日、内原駅の満開の桜に見送られて、山形県の二中隊百余人を加えた三百余人の杉浦中隊は、大いなる夢と希望を抱いて勇躍渡満の途にいた。四月十一日神戸港出航、雨の中を両親が見送りに来てくれた。乗船したのは「うる丸」という船体を真っ黒に塗った貨客船だったが、名にし負う玄界灘も無事に越して、大連港に上陸した。初めて足を踏み入れた満州の地に立って、感激

たことから、第二班長を命ぜられ、率先して作業に励むこととなった。

毎日の作業は飯盒飯携行で、現地人の大工がゲージで工作した材料をトラックで現地に輸送、それを私たちが一棟分ずつ現場に運び、建て方専門の作業だった。北満でも夏は四十度を越す猛暑続きで、上半身裸になっての作業だった。しかも材料は雑木の生木なので大変に重く、一本六十キログラム前後で一人で担ぐのは大変だった。毎日のこととして、肩は破れ出血しても休んではおれなく頑張り通した。別の大隊は建設場所が離れていたもので、天地根元造りの小屋に起居して作業をしたので、大いに作業は進展した。全員の努力の成果で、十月末には予定どおり建築作業が終了し、建築班は解散となった。

ひと夏を通しての重労働だったので、背骨に障害を起こし両手が痺れるようになり、ひどい時は上衣のボタンも掛けられないくらいだった。今でも無理すると背骨に痛みが起きるので、注意しな

ひとしおだった。大連から汽車にゆられて伊拉哈に向かったが、一夜明けても同じ景色が続き大陸の大きさに目をみはった。四月十六日の早暁、当面の目的地伊拉哈駅で下車したが、四月中旬なのに地面は凍っていて気温は零下、着ている夏服では一段と寒さを感じ身震いがした。

嫩江大訓練所山崎所長（第一次弥栄团长）の迎えを受けて、一応全員伊拉哈訓練所の宿舎で旅装を解き、三日後に嫩江大訓練所に移った。ここは全満で最初のしかも最大の訓練所で、三千人が収容できる規模で、宿舎は俗に言う天地根元造りで坪み小屋だった。だが続々と入所する各中隊の宿舎も手狭で、さらに越冬用の防寒隊舎の建設も遅れていて、すべてが後手後手の状態だった。

早速に防寒隊舎の建設が始まり、各中隊から二、三人の要員を募集し、七十数人の建設班が編成された。それを三個班に分け、競争で作業することになったが、私は内原時代から建築班に入っていて、古賀先生から防寒隊舎建設の講習を受けてい

がら働いている。レントゲン検査によると、背骨から腰骨まで縦横共にずれているとのこと、手の施しようがなかった。

その年の十一月から木工班に所属、翌年には班長に指名されて、訓練期間中は建築木工の技術習得に励んだが、これが後年大変に役立った。

### 三 開拓団改組で原隊復帰

昭和十六年には組織が変わり、第一次義勇隊開拓団となったので、みんなに後れをとらないために本業である開拓に戻ることに、高根開拓団津島部落の一員となり共同生活に入った。共同宿舎や、家畜小屋造りにも精を出し、修得していた大工技術を大いに発揮した。翌十七年には部落長となり、みんなをまとめて農事に励んだ。昭和十八年になると妻帯する者が出てきて、二戸建二棟の妻帯者用の個人住宅を建設したが、そのころになると戦局も激しくなり、現役入隊者も増え部落の人数も少なくなってきた。その年の秋、団本部建設部の個人住宅建設責任者が入隊し、後任者が

いないので私に是非という話が出て、団体全体のためから引き受けて団本部に移った。翌年三月に私にも召集令状がきて、すべてを投げ打って入隊した。

#### 四 瓊瑠六一二部隊に入隊

昭和十九年三月七日、ソ連との国境に接する瓊瑠六一二部隊の営門をくぐった。第五中隊軽機班に所属し軍装一式が渡され、直属上官の官姓名を知らされた。この部隊は独立国境守備隊で、隊長は大田大佐、第五中隊長は中原中尉、軽機班長は休場軍曹、この班長は北海道出身で、顔は浅黒く肩幅のがっしりした、日本陸軍の代表的下士官と言ふべき人だった。翌日から、早速にこの班長にびっしりとしぼられる事となった。

教練第一日目、「舎前に整列！」の号令で二列横隊に並び「右向け右！」で四列縦隊になり、番号を掛け、駆足で営門に向かう。営門では「歩調とれ！」の号令が掛かり、手を大きく振って歩く。門を出ると、すぐに駆足で演習場までの道一・五

で育ってきたのかと気に掛かっていた。戦友のそれとも言葉を交わすこともないし、一見して暗く陰険な顔をしていた。そんなことから、石鹼を盗んだのもKだと信じてしまった。石鹼がないので、毎日取り替えるべき襟布も洗濯ができず、「このひなまざるい奴めが！」とひきはがされ、返してもらおうとまたとり上げられた。上官のH上等兵に「宮西！ ちょっと来い」と呼びつけられ、途端に「この野郎！」と木銃で胸を突かれ、危うく二階から落とされるところだった。それでも私は洗濯をしないので、次の日にはH上等兵は自分で洗濯をしていた。これはまずいと思った私も仕方なく「私がやります！」と言うと、「すてとけ」との怒声、さらに「やらせて下さい！」と前に出たところ、いきなり「この野郎！」と再び鉄拳が飛び、眼鏡が床にたたきつけられて割れてしまった。このため翌日の各個教練で班長の指示した目標が見えず、大体の見当をつけて撃っていたが、班長が来て帯剣と銃身と目標に合わせたので、すぐに

キロメートルを休みなく駆ける。演習場に着くと、携行している十一年式軽機関銃での射撃訓練が開始された。この軽機は命中精度はよいのだが、欠点は重いことと、装填薬という弾を入れる箱が右側に出っ張っていることだった。そのために、銃を担いで走ると天秤担ぎとなってすぐに班長の怒声が飛ぶ。「このでこ助、肘を締めろ！」と怒鳴るが、この班長は叱るときには必ず「このでこ助」と言うので、我々は「でこ助班長」と徒名をつけていた。

三カ月間みっちり鍛えられたが、営内班では古参兵によって何かにつけて意地悪く扱われ、少しも気を緩める事ができない毎日が続いていた。ある日のこと、配給になったばかりの石鹼を盗られたが、多分左隣のKという初年兵だと思ったが、現場を見ていないので何とも仕方がなかった。以前に、私が班長室より下げてきた手のついていないご飯を、入口にいてさつと盗って食卓のかけで一人で食べたということもあり、どのような家庭

ばれて大喝一声、「このでこ助！ どこを撃っているのか、敵はどこか無駄弾を撃つ奴があるか！」と言いながら片足を背中にかけ、両手で鉄帽を力いっぱい引っぱったので顎紐が切れてしまった。顎が痛んで痛みが十日ほどとれずに、食事も思うようにできなかつた。一個の石鹼を盗られたばかりに、ひどい目に遭ってしまった。

いろいろと苦勞をなめながら三カ月が過ぎ、一期の検閲も終わった。

六月からは陣地構築の戦車壕掘りが始まったが、北満とはいえ夏は四十度を超す炎天下で、継ぎの当たった下着、素足に脚絆を巻き野草で編んだ草鞋を履き、汗拭き手拭いで鉢巻きをした格好で円碇を杖にしている姿は、正に江戸時代の駕籠担ぎの雲助というところだ。毎日毎日の作業で手は円碇の柄の跡で固くなっていた。話に聞いていた北海道の蛸部屋たこや同然の重労働の毎日だった。

このような苦勞を四カ月も続けて構築した戦車壕も、早くからソ連軍に知られ、ソ連軍侵攻時に

は架橋戦車によって難なく突破されて物の役にた  
たなかったことを後で聞き、何のために血と汗を  
流したのかと残念に思ったことだった。後期もい  
ろいろなことに出会ったが、八月に一等兵に進級  
し、大方楽になった。

戦車壕掘りも終わり陣地内の補強工事班に派遣  
され、各中隊から集められた十五人と共に、東北  
出身の召集伍長の班長のもとで幕舎生活に入った。  
十月中旬に、この班にきて初めての外出が許され  
て、二人以上の組を作って外出した。私もO君、  
Y君の三人で組を作り、瓊瑠市街に着き、帰隊時  
間と集合場所を決めて各自単独行動とした。小さ  
い街で特別に見るところもないので映画館に入っ  
た。次いで昼食を食べたが、まだ時間があったの  
で写真館に入り軍服姿の写真を一枚撮ったが、そ  
の後この写真は肌身離さず持ち歩き、家郷を出て  
からの貴重な写真の一枚となり、これを見ると当  
時のことを思い出す。

少し早かったが、待ち合わせ場所に行くといの  
った。すぐに発見されて、銃前哨に誰何され「今  
ごろどこから来てどこに行くのか!」と問われ、  
仕方がなく「表門より作業班に帰るところです」  
と答えたら、「表門はとっくに閉まっている」と言  
われて返す言葉がなかった。相手は二年兵の一等  
兵で大体の事情は察していて、我々をかわいそう  
に思ったのか「うろろろしないで早く行け」と言  
って助けてくれた。三人はほっとして急いで帰班  
した。

班では我々の帰隊が遅いので心配していた。班  
長の前で「宮西他二名ただいま帰りました」と報  
告した。班長が何も言わないうちに、三年兵のF  
上等兵が「貴様たち外に出ろ!」と大喝した。こ  
れは大分絞られるなど覚悟を決めて外に出た。

F上等兵は「貴様ら今ごろまでどこをうろつ  
ていたのか? たるんだるから今から気合を入れ  
てやる」と言いながら、一人ずつこてんこてん  
にぶん殴った。顔がゆがんだような感じがしたが、  
我慢した。F上等兵も三人相手では自分の手も随

二人は来ていなかった。しばらくしてY君が来た  
が、O君はまだだった。あまり時間もないので、  
二人で探し回った。O君は酒好きなので、そのよ  
うな様子のお店を探し何軒目かで見付けたが、酔い  
つぶれていた。たたき起こして連れ出したが、腰  
がふらついて歩いて歩けない。仕方なく両脇から二  
人で支えて歩くが、すぐにへたり込んでしまう。  
知らなかったことは言え大変な奴と組んだもの  
と後悔したが、どうにも仕様がな。残して帰れ  
ば我々も処罰されるので、何とかしても連れて帰  
隊せねばならない。

やつのことで表門の見えるところまで来たが、  
既に門は閉まっていた。そのまま行けば営倉入り  
は間違いない。O君も酔いが覚めて青くなってい  
た。歩兵隊の兵営と異なり山の陣地なので、うま  
くゆけば事無き得ると、三人で戦車壕を渡り鉄  
条網を掻い潜り、陣地内の道なき山中を大体の見  
当をつけて進む。やつと道に出たので安心したの  
が失敗のもとで、うっかり西山衛兵所に出てしま

分と痛かったことだろうと思う。前任上等兵とし  
て、班長の手前やむを得なかったようだった。お  
かげで班長からは「以後気を付ける!」と一言あ  
っただけで公にならずに済んだが、もしこの事が  
公になったとすれば、陣地破りの重罪で軍法会議  
に掛けられて厳罰に処されたと思う。

余談だが、翌年一月に私たちと同じような事件  
が起きた。私と同時期の在満召集者で新京の地理  
院に勤めていた官吏で、その経歴を買われて陣地  
整備計画本部で重要な仕事に就いていた。私も班  
長の命で本部に行った折一度会ったことがあるT  
という人だったが、以前の部下が瓊瑠県公署に勤  
務していたので、正月に招かれて特別な計らいで  
一人で外出した。久しぶりの面会と根が酒好きだ  
ったのか、すすめられるままに飲み、結果門限に  
間に合わず、私たちと同じように戦車壕を渡り鉄  
条網まで来た所で酔いが回り鉄条網の杭に寄りか  
かったまま深い眠りに入り、北満一月の夜間、零  
下三十数度という寒気で冷凍人間化してしまった。

あたら優秀な人材が不名誉な凍死では、家族や元部下だった人もさぞつらいことだったと、私の体験からも深刻に考えることだった。

#### 五 新設部隊に転属

昭和二十年二月十八日付けで第十三師団に転属を命ぜられ、瓊瑋部隊から北安に移った。瓊瑋六一二部隊では、いろいろと苦しく嫌な事ばかりで楽しい思い出はなかった。転属先は第三大隊本部輜重隊だったが、この兵舎の元の部隊は南方派遣となり、途中東支那海で米潜の魚雷によって全滅したとのことだった。部隊編成が完結してもなかなか移動せず五月になった。

ある日、近くの青少年義勇軍訓練所から訓練生が勤労奉仕に来たが、ちようど昼食時間に通り返った訓練生を見れば、まだまだ親元が恋しい子供供した少年たちで、話によれば、一般の志願者だけでは不足なので、各市町村に人員を割当、在学中の者まで募集したとのこと。さらに飯盒の中味は赤飯かと思ったが、そこには高粱飯が三分

の一くらい入っているだけだった。私たちの場合は米飯ばかりだったので、時勢の然らしめるころとはいえ、育ち盛りの少年たちに哀れさを感じたものだった。

五月初旬に連隊旗が下賜され、厳かに奉載式が行われ、我が部隊も正式な歩兵連隊となった。十八日から移動が始まったが、どこに行くのか一切不明のままに、ただ貨物列車に詰め込まれて走るだけだった。周囲の様子から南下していることだけは薄々感じていたが、びっしりと詰め込まれて横にもなれず、小便は桶で用を足したが、大便是停車時に外に出てするしかなかった。外に出て驚いたことは、一面大便の山で線路が埋まるほどで、いつ発車するか分からないので、もたもたしてはおれずに所かまわずだったのだらうと思った。いかに関東軍の部隊が南下して行ったのかの証拠でもある。

疲労困憊の末、二十二日にやっと下車命令が出た。降り立ったのは、なんと南朝鮮全羅南道の清

州で、一時市内の小学校で宿営することとなった。

二日後に輜重隊も行動したが、途中小休止の際、山形出身のSという初年兵が、馬の口取りを手に巻いたまま馬の左脇で休んでいたが、何に驚いたのか馬が急に走り出し、S初年兵は引き倒され腹の上を車が通り、そのまま立ち上がれなくなった。

班長から、私たち二年兵四人でSを担架で病院に搬送するよう命ぜられたが、未知の土地で、行けども行けども街に出ず、病人の容態も気懸かりだが肩も痛くなってきた。やっと病院を見付け医師に事情を説明したが、診断の結果「内臓破裂で手術をする。だれかA型の者はいないか」と尋ねられた。あいにくA型は私一人で、早速採血され別室で休んだが昼食も夕食もなく、おまけに多量の採血で体はふらふらになっていた。採血されてもブドウ糖一本、卵一つも与えられず、いくら時局柄といっても無茶苦茶な待遇だった。

九時過ぎに、医師から「手をつくしたけど、何しろ状態が悪く時間も経っていたから助けられな

った。戻ったらそのように報告してくれ！」と言われた。途中、貧血状態に加えて空腹と疲労で体がしつかりせず、戦友に支えられて約六キロメートルの道をやつとの思いで帰隊した。週番将校に委細報告、「よし！ 御苦労。明朝一時間の起床延期」と指示された。夕食は残してあったので、冷え切った飯を掻き込み床に入った。大変な一日であったが、S初年兵も自分の不注意とはいえ、不名誉な死に方で家族もさぞ悲しんだことだらうと思うと、残念で致し方なかった。彼の冥福を祈るばかりだ。

#### 六 濟州島の警備に任ずる

六月十七日、命により麗水港より濟州島に向かい、高台の丘で幕舎生活に入った。戦局が緊迫すれば物資の補給もままならなくなるので、糧食温存のため半減食となり、野菜等は現地自活となつて野草を食べ始めた。十日ばかり経ったころ、猛烈な台風が襲来し、幕舎は吹き飛ばされず濡れになったこともあった。

若い兵隊にとつては腹がすくことが一番つらいようで、食べ物に関する事件がいろいろと起きた。土地の者が、航空燃料用のアルコールを取った後の甘藷で作った団子を一個五十銭で売っていたので、それを買って腹の足しにしていた。

七月になると対戦車特攻訓練が開始された。戦車隊から教官が来て我々を整列させての第一声は、「貴様たち、世界の三大兵器を知っているか！」という質問だった。アメリカのB-29と、ドイツのロケット弾ということまでは答えられたが、残るひとつがなかなか答えられなかった。「それは日本軍の爆薬を抱え敵戦車に飛び込む貴様たちだ！」と、その教官は言い切った。一同は哑然として声が出なかった。入隊以来、何度も言われていた「お前たちの代わりは、赤紙一枚でなんぼでも来るんだ」という言葉が改めて頭に浮かんでいた。

#### 七 米軍の空爆と終戦

八月に入ると、米軍による空爆が激しさを増し

軍の指示で再び手送り作業で海岸に集積替えした。その後、数日経つと、今度は沖合いに海没させるという米軍の指示が出たが、陸軍は船を持たないので地元の漁舟を雇うこととなった。しかし足元を見られているので高く吹っかけられ、一箱五十銭で交渉成立した。まったく無駄骨を折らされた弾薬だった。

米軍は一旦は上陸したが、そんなに大きくない島なので、島の治安は日本軍に委任して引き揚げたので、ここを去るまで敗戦兵という屈辱的な扱いを受けずに済んで幸いだった。

#### 八 戦後の島の事情と引揚げ

終戦ということが知れると、現地住民の態度は手の平を返すごとくになった。我が隊の横の道路に凱旋門を建て、「歓迎米軍、祝朝鮮独立」と大書した横断幕を掲げ、しかも日本軍糞食らえと言わんばかりだった。そして、それまで日本軍に対して出荷していた物資は一切出さないと宣言していた。こっちも困るので交渉したが、全然話になら

てきた。島の近くで輸送船が夜通し燃えていたこともあり、いよいよ米軍の攻撃が近づいたと感じた。いざ戦闘になったら、何日持ち堪えられるかと心細いことを考えるようになった。濟州島警備の兵力は、一応七個師団七万人と言われていたが、私の計算では内地から来た部隊は四十歳過ぎの召集兵が多く、その装備たるや粗末な服に竹製の水筒で、小銃は五人に一丁程度の有様だった。満州から下ってきた我が隊が、一番程度がよいという有様だった。濟州港に野積されていた弾薬が爆撃され、次々と連鎖爆発を起こし、離れている我が隊にも聞こえていた。アルコール工場も爆破され、歩哨に立っていた我が隊の初年兵も一人戦死した。守備隊本部からの命令で、全弾薬を島の中央のカンナ山の洞窟に移すことになり、全員手送りで運んだ。次々の作業でみんな疲れ切っていて、移動する際には眠りながら歩いていた。その作業をやつと終えて、やれやれとひと息入れた三日後の八月十五日に、終戦の大詔が渙発され、米

なかった。ただ、畑に投げ棄ててある甘藷と南瓜の茎葉ならということになったが、甘藷の方はまあまだが南瓜の茎葉は刺があつて、とても食べられるものではなかった。毎日缶詰類ばかりで、そのうちに俗に言う「あくちが切れる（口の両横が切れる状態）」というようになり、便通も悪くなって困ってしまった。日常の行動は特別にすることがなく、泳いだり島内をぶらついたり比較的自由で、そのうちに現地人の友人もできて遊びにも行った。

ある日、便所に行つていざ放尿をという時、豚の声がするので見れば、大きな豚が糞尿の中ほどまでつかつて上を見上げていた。これには私も驚いて、そこそこに用を足して出て行った。放し飼いの豚は、用が済むのを待っていてぱくりとやるので、きれいなものだった。

#### 九 内地へ引き揚げ、帰郷

米軍の指令に従つて、十月二十九日に米海軍の上陸用艦に乗船、途中東支那海で大暴風雨に遭遇

し、生きた心地のしない体験をして三十一日夜十時過ぎに佐世保港に着いた。船酔いをしなかった者はほとんどいないくらいの大荒れだった。

頭からDDTをかけられ、着ていた物は消毒のため全て脱がされ禪一つになり、自動小銃を持った大男の米兵に「あっちだ！ こっちだ！」と追いつけられる姿は、さながら地獄で鬼に追われる亡者もさもありなんという格好で、戦争に敗れた事を、身をもって実感した。いろいろな手続きを済ませ、帰郷先までの乗車証明と現金二百円を受け、佐世保駅から乗車し郷里高松に向かった。

軍服姿の者がたくさん乗っていたので、沿道の子供たちが盛んに手を振っていたのが印象に残ったが、戦時中そうして見送ったことが習慣となっていたからだと思った。だが、敗残の身ではつらく済まないという気持ちでいっぱいだった。広島駅で一時停車したので、下車して市街の方を見たが、その有様は聞いていた以上で、原爆の威力にびっくりさせられた。

めることを場長に申し出た。場長からは一応慰留されたが、自立する仕事を望んでいた私は断り、山形市に出た。ここでも一年半ばかりいろいろあったが、私のごとき野人には都会生活は不向きということを悟った。

#### 十二 二度目の開拓人生

昭和二十三年九月、山形県庁から各地への入植募集があり、以前から考えていたので早速に北海道開拓を希望し、同志五人のうち一人は後日参加ということ、まず三人と一家族で十一月十日、小雪の舞う山形駅を出発し、道東川上郡の標茶駅に降りた。そこから徒歩で上多和の弥栄部落に向かったが、既に日は落ちて真つ暗くなった初めての道では、全然方向が分からなかった。背負っている荷物は肩に重くのしかかり、苦しい旅路となったが、やっと部落の明かりが見えてほっとした。山形県出身の皆川さんの家で温かい大麦の団子汁を頂いたが、その味は未だに忘れることはできない。その夜から村山さんの家で厄介になっ

岡山から宇野までは無蓋車だったが、幸いに晴天だったので助かった。久しぶりに見る瀬戸内海を渡り、高松に上陸。市内も空襲で大半は焼け野原になっていた。八年ぶりに我が家に戻り両親も大変に喜び、早く復員していた兄も元気だった。夫が復員していない妹一家もいて賑やかで、一家九人家族となった。配給米も少ないとき、食事だけでも大変だった。戦に破れたとは言え、志半ばにして帰ってきた私は、早く再出発しなければと思案する毎日となった。

そのうちに、山形の同年兵から来ないかとの誘いがあって、昭和二十一年二月末に山形県金山町に行き、一応神室習練農場の主任代理として働くこととした。場長は県内屈指の資産家である岸家の次男で、名目だけの場長で、実際は二人の若い助手と地元の子、六人の娘さんで作業をしていた。翌年の二月、この農場の初代主任だった笹原氏が復員して農場に戻ったが、私は少し言葉を交わしただけで、この人の下では働く気もなくなり、辞

た。

翌日、元満拓理事で当時は第二の弥栄村建設の指導をされていた中村先生による面談があったが、何か特技はないかとのことで私は「大工がやれる」と答えたが、中村先生は「これから当弥栄開拓事務所の建設が始まるので、その仕事に出なさい」と言われた。

一緒に来た桑島さんは樺太引揚者で、以前郵便配達の実験があるので、上多和部落の郵便物集配の仕事を担当することとなった。宍戸さん一家は上多和部落に入植、斉藤さんは釧路で働くこととなり、一応全員の仕事が決まった。開拓事務所は、多和の旧軍馬補充部の馬屋を解体、移築する作業で、虹別地区の人たちが請負っていたので、一日五百円の日給で働いた。仕事は建前までの請負だったが、その後も仕事があり、ひと冬休みなしに働くことができ、お金に困ることもなく大変に助かった。正に「芸は身を助ける」ということだった。

## 十一 別海泉川に入植

昭和二十四年四月二十四日、手櫓に荷物を乗せて別海村泉川地区の入植地に向かった。この冬は今までで一番降雪量が多く、四月でも残雪が深かったが、ここ数日の好天気で一気に雪解けが進んでいた。沢地では深い雪の上を雪解けの水がどんどん流れていて腰までつきり、やつとのことで北斗班の共同小屋にたどり着いた。

北斗班は元の義勇軍出身者ばかりの人たち十一人で組織されていて、前年に入植していた。知人もいたので雪解けが終わるまで厄介になる。五月になり、遅れていた桑島さんも合流したので仮小屋を造り共同生活を開始し、開拓の重労働に耐えるには栄養補給が大切なので、乳の出る山羊を買い入れ、さらに配給米の不足を補うために蕎麦二俵を用意した。野菜は自生している山菜で間に合わせ、一年を過ごした。その後、桑島さんの都合で二年目からは個人経営になった。昭和二十六年には、友人の勧めもあつて見合いをしたが縁がな

かった。

私も次男であつたので、土地の人がよいと思つていたが、その後山形県で嫁の世話をするということになり、一応山形に帰った。

## 十二 結婚、そしてその後の苦闘

山形県庁で世話をしていた人の二人に一人は再婚者だった。私は初婚者を望んでいたので、その一人、斉藤家を県の職員同伴で訪問した。斉藤家は以前は地主の家柄で、現戸主は村の収入役をしている人だった。私は率直に「郷里には家も、親兄弟もおりますが、私は少年期に満蒙開拓義勇軍に入り満州に渡り、引揚げ後再び北海道開拓に入り何とか経営の見通しもついたところですよ」と話した。北海道は外国並に思われていた当時、そんなに遠い所に娘が一人で嫁に行くことは裏に何かあると思ひ、二人だけで話をする場を設けてもらった。話によれば、両親に早く死に別れ姉妹弟の三人で伯父の家に世話になっていて、適齢期を迎え結婚の話はあるも、結局は両親がないと

いうことで立消えになってしまう。年もとるばかりだし、いつまでも伯父の世話になっているのも心苦しく、申し込んだということだった。私もその事情を知り、人柄もよかつたので、この人となら辛抱できると考えたが、今後のこともあるので家族の承諾が必要と思ひ、その旨を申し入れて伯父さんの了解をとつた。伯父さんは「本人も嫁に行くというのでもらつてくれないか？」との返事で、結婚話は決まつた。当時の村山知事の媒酌で、結婚式も済ませて泉川に戻つた。

それからは、二人で力を合わせて開拓営農に励んだが、人間運のつかないときは続くもので、飼馬は良い馬だったが種付けが悪く一頭も産まず、さらに一頭買入れたが仔馬一頭を残して死んでしまった。緬羊は犬に噛み殺された。また、酪農については、はじめてから七年間に牝三頭しか産まねかつた。遣り繰り算段して買入れた牛も種付き悪く、獣医の手術から死亡した。このとき妻は声を出して泣いていた。全て共済保険加入以前の出来事

で、一切が自己負担で経済的にも苦しかった。

昭和二十八年に長男が生まれてから三男二女の子宝を得て、にぎやかな家庭となつたが、その反面、次々と病気をし、その看病や子供の世話、そして本業の農作業、家畜の世話で体がいくつあつても足りなかつた。その無理がたたつて、私まで入院してしまつた。

後に友人より聞いた話だが、当時の開協理事会で「宮西も本人まで入院するようではもう離農だな！」という話が出ていたとのことだった。

このように不連続きだつた時代を何とか努力してしのいでいるうちに、少しずつ明るい兆しが見えてきて、営農の基礎も築かれてきた。

昭和五十年には、待望の住宅を新築し、牛乳出荷等に苦勞していた取付け道路も完成し、便利になつた。機械化農業経営を取り入れて大型酪農に移行した。子供も次々と自立をし孫に囲まれるようになり、昭和六十三年、三男の結婚を最後に親としての責任も大体終つたので、家業を長男に

すべて譲った。

若い者の経営意欲をなくさないようにと、できるだけの事はして渡したので満足している。妻にも、熊が出るような未開の原野に連れて来て随分苦勞をさせたが、よくついてきてくれたものと深く感謝している。

平成十四（二〇〇二）年二月十六日には、子供夫婦十人と孫十一人が集まって、川湯グラウンドホテルで私たち夫婦の金婚式を祝ってくれた。

現在は老妻と共にゲートボールで体を動かし、下手な短歌や俳句で呆け防止に努めて悠々と余生を過ごし、平和の喜びに浸っている。

○満蒙に抱きし夢も虹と消え

戦禍に散りし拓友そ悲しき

○牛と共楽農目指し五十年

夢に向かつて歩み続けり

○北の町大地自然を師となして

誇りを持って農に一生

死線を越えて！

北海道 高橋 みつ子

はじめに

日本が戦争に負けたために起こされた、あの悲劇。それは今から六十年も前のことです。それは、満州に住んでいた開拓団をはじめとする多くの日本人が、悲惨極まりない引揚避難の苦勞を強いられたことで、これを体験した私は命ある限り決して忘れることができません。筆舌に尽くし難い忌まわしいあの惨状は、これを体験した人のみが知る悪夢のような出来事だったので。そして、戦争の残酷さを身をもって体験した人類が、今もって世界の各地で戦火を交えていることの愚かしさは、誠に悲しいことです。

主人は戦争末期に召集され、北滿のチチハルで敗戦を迎え、拳げ句の果てにシベリアに抑留され、残された家族は着の身着のまま一年有余の避難の